

1 非行少年の分類と現状

少年法第 3 条により, 非行少年は以下の 3 つに分類される:

犯罪少年 14 歳以上で犯罪を行った者

触法少年 14 歳未満で犯罪少年と同じ行為を行った者

ぐ犯少年 今後犯罪少年や触法少年になる可能性の高い者

近年, 非行少年数は減少傾向にあるが, **多様化・低年齢化**が進んでいる。

表 1: 非行問題を理解する 3 つの危機

危機の種類		内容	対応の特徴
発達の危機	遍在性	思春期・青年期特有の心理的不安定さ	予防・開発的対応
基本的危機	偏在性	精神障害や知的・発達障害を伴う場合	医療的理解と対応
個人的危機	偏在性	困窮した経済状況, 崩壊した家庭環境での生育	福祉的理解と対応

! 遍在性と偏在性を混同すると, 過度な一般化が起こり, 問題をより深刻化させる。

2 非行少年の 3 つの顕著な傾向

悪い自己イメージ 劣等感・疎外感・低い自己肯定感

自己管理能力の低さ 基本的生活習慣の欠如, 金銭管理能力の不足

コミュニケーション能力の低さ ソーシャルスキルの欠如, 衝動や攻撃性のコントロール困難

非行の悪化段階 (ショウ・マッケイ, ベッカーの説)

1. 遊戯・最初の規則違反
2. 社会的規範との葛藤 (喫煙・飲酒・深夜徘徊)
3. 非行行動の継続
4. 非行集団への忠誠と一体感
5. 組織的非行行動
6. 非行ギャング化とヒエラルキー上昇

3 ハーシの社会的絆理論 (非行予防)

非行行動は社会的絆の 4 つの強さによって抑制される:

愛着 両親・教師・仲間との情緒的つながり

投資 教育や仕事への思い入れ・こだわり

巻き込み 日常的な集団活動・余暇活動への参加

規範観念 社会規範の受容と習慣化

現代の非行少年はこれらすべての要素が弱い傾向にある。

4 学校における 3 段階の援助

学校における対応は、N-of-1 に考える必要もある:

表 2: 非行問題を理解する 3 つの危機

援助レベル		対象	主な対応
1 次的援助	発達支持的	すべての子ども	規範意識の学習, 社会的絆の形成, 構成的グループエンカウンター, ソーシャルスキル・トレーニング
2 次的援助	課題未然防止・早期発見	配慮を要する子ども	個別対応の継続, 専門機関との連携, 呼び出し面接 (丁寧語で淡々と)
3 次的援助	困難課題対応	犯罪を犯した少年	警察・家庭裁判所・児童相談所等の専門機関による処遇

【質問】

1. 最近の自己管理能力は、どうやって鍛えてますか。
2. 社会的絆は、デジタル空間でも成立すると思いますか。
3. 規範意識は、文化によって変わるものだと思いますか。